

研究ノート

慶長5年9月晦日(9月30日)～10月1日の伊東家軍勢による宮崎城攻略について

白 峰 旬

はじめに

慶長5年(1600)9月15日の関ヶ原の戦い後における九州での動向として、伊東家(日向国飩肥城主)の軍勢が石田・毛利方であった高橋元種領有の宮崎城(城主は高橋元種家臣の権藤平左衛門)を攻略した戦いがあった。

この戦いの経過等については、『清武町史』通史編上巻⁽¹⁾、田代学「原典史料にみる宮崎城」⁽²⁾に詳しい。

この戦いの名称について、前掲『清武町史』通史編上巻では「宮崎合戦」、前掲・田代学「原典史料にみる宮崎城」では「宮崎城攻防」としている。

この戦いの時系列については、前掲『清武町史』通史編上巻では『日向記』⁽³⁾の記載をもとに、「伊東軍が清武城から出陣したのは「九月晦日(九月三十日)」、翌朝の十月一日暁に宮崎城を攻め落とした」としている。

前掲・田代学「原典史料にみる宮崎城」では「伊東勢は二十九日夜に清武城を出陣し、翌三十日に夕刻までに宮崎城を囲み、同日夜に攻撃を開始、翌十月一日早朝に城を落としたと考えたい」としている。伊東家の軍勢数については、前掲『清武町史』通史編上巻では「合計三〇〇〇人」⁽⁴⁾としている。前掲・田代学「原典史料にみる宮崎城」では「宮崎城攻防の時期には伊東・高橋両氏ともに関ヶ原に出兵している状況であり、とくに宮崎城には本城あがたからの援兵が無い状況であり、伊東勢三千人、宮崎城勢三百人という数字は士卒に雑兵を加えたとしても程遠いものであり、両軍兵力の比率十対一をそのままに、兵数をかなり水増して(恐らくは単純に十倍か?)後世に伝えられたものと推測される」としている。

こうした点を前提として、本稿では『日向記』収載の「同城乗之時敵ヲ討并疵ヲ蒙ル人数」⁽⁵⁾、「同時討死人数」⁽⁶⁾という史料(表1参照)の分析をもとに宮崎城攻略について考察したい。

前者の史料は、合戦手負注文に該当する史料であり、宮崎城攻略に参戦して敵を討った伊東家の家臣名のリストであり⁽⁷⁾、攻め口(宮崎城への侵攻ルート)、被疵の種類、敵のだれを討ち取ったのか、などの記載がされている箇所もある。前者の史料については、以下、史料Aと略称する。

後者の史料は、宮崎城攻略に参戦した伊東家の家臣のうち戦死(討死)した者のリストであり、戦死した家臣名が列記されている。そのうち、どのような状況で戦死(討死)したのかについて記載されている箇所もある。後者の史料については、以下、史料Bと略称する。

1. 攻城側の軍勢数

上述したように、前掲「同城乗之時敵ヲ討并疵ヲ蒙ル人数」(史料A)は、合戦手負注文に該当する史料であり、宮崎城攻略に参戦して敵を討った伊東家の家臣145人の名前が列記されている(表1参照)。ただし、史料Aの末尾には「右ノ人数口々方々ヨリ攻登り合戦、分捕高名ス、此外ニモ手柄ノ者数々也」(下線引用者)と記されていて、上記の145人以外にも宮崎城攻略に参戦して手柄を立てた者(伊東家家臣)がいたことがわかる⁽⁸⁾。

前掲『清武町史』通史編上巻⁽⁹⁾によれば、宮崎城攻略の伊東家の陣立て(編制)は、以下のようになる。

- ▼佐土原への押さえ… 仮屋原甚右衛門〔柴波洲崎組〕(400人)。奈古山(宮崎市南方町池内・奈古神社)に布陣。
- ▼木脇と穆佐への押さえ… 五人衆〔田野勢〕(600人)。的野(宮崎市高岡町上倉永)・倉永に布陣し、柏田(宮崎市・宮崎城の近く)に伏兵を置く。宮崎落城後は細江村(宮崎市細江)に在陣。
- ▼先 手… 右松又左衛門(300人)
 - 二の手… 肥田木図書・長倉織部正ら(300人)
 - 三の手… 矢野侃世ら(300人)
 - 四の手… 長倉九郎右衛門ら(300人)
 - 五の手… 落合浅之助ら(300人)
- 計 1500人
- ▼後詰… 稲津重政ら(500人)。清武城に在留。
 - 合計 3000人

この陣立て(編制)を見ると、宮崎城攻略の軍勢は各300人の5軍(先手~五の手)編制で計1500人であったことがわかる⁽¹⁰⁾。

しかし、上述したように、史料A(宮崎城攻略に参戦して敵を討った者と被疵の者)の合計人数は145人であり、史料B(宮崎城攻略に参戦して戦死〔討死〕した者)の合計人数が43人であるので、両方の人数を合計すると188人であるので、人数的に α を考慮しても、上記の計1500人(先手~五の手の人数の合計)というのは過大な数値(人数)であると思われる。

よって、史料A、史料Bの合計人数(188人 $+\alpha$)をもとに考えると、攻城側(伊東家)の軍勢数は、200人前後だったと推測できる。

2. 攻城ルート

宮崎城の縄張図は、石川恒太郎氏(「宮崎城」、『日本城郭大系』16巻、新人物往来社、1980年〔図1〕)、千田嘉博氏(「宮崎城の構成」、『宮崎城跡測量調査報告書』、宮崎市教育委員会、2009年〔図2〕)、八巻孝夫氏(「日向国・宮崎城の基礎研究」、『中世城郭研究』27号、中世城郭研究会、2013年〔図3〕)の3種がある⁽¹¹⁾。さらに八巻孝夫氏の縄張図をもとに、新名一仁氏が曲輪名の比定(通称名・伝承名を載せたもの)をおこなったもの〔図4〕が

ある⁽¹²⁾。

宮崎城を攻略する場合、攻城ルート＝登城ルート(登城口)ということになるが、新名一仁氏は『上井覚兼日記』で確認できる5つの登城口(目曳口、野久美〔首〕口、金丸口、和田口、柏田口)と、それ以外に2つの登城口(満願寺口、船ヶ崎口)を特定している⁽¹³⁾。

前掲『日本城郭大系』の宮崎城縄張図には、船ヶ崎口、万願寺口、目引口、野首口の4つの登城口が記載されている⁽¹⁴⁾。

史料Aには攻城ルートが記載された箇所があり(表1参照)、それをまとめると以下のようになる。

万願寺口(より攻め上る)…8人

目引口(より攻め上る)…5人

舟ヶ城(より攻め上る)…2人

柏和田口(より攻め上る)…1人

野頸口(より攻め上る)…1人

このように、攻城ルートとして、最も人数が多いのが万願寺口、その次に多いのが目引口である。前掲『日本城郭大系』の宮崎城縄張図を見ると(図1参照)、万願寺口は宮崎城の東北から本城(本丸)北側の直下へ通じるルートであり⁽¹⁵⁾、目引口は宮崎城の西南から本城(本丸)北側の直下へ通じるルートである⁽¹⁶⁾。

よって、伊東家の軍勢は、主としてこの2つの攻城ルート(東北方面からと西南方面からの2つのルート)を通過して宮崎城本城(本丸)への侵入をはかった(つまり、いきなり本城〔本丸〕を攻めようとした)ことがわかる。

史料Aによれば、万願寺口より攻め上ったのは、5軍(先手～五の手)編制の大將では、肥田木図書助(二の手の大將)、目引口より攻め上ったのは長倉九郎右衛門尉(四の手の大將)、落合浅之助(五の手の大將)である(表1参照)。

なお、長倉織部佐(二の手の大將)は舟ヶ城(船ヶ崎口のことか?)より攻め上り、矢野侃世(三の手の大將)は野頸口から攻め上っている(表1参照)。

史料Bによれば、右松亦左衛門尉(先手の大將)は、大山刑部大輔(敵の重臣)と鎧を合わせて討ち取ったが、その鎧疵により討死している(表1参照)。よって、先手として最初に宮崎城に突入した初期の戦闘は激戦であったことがわかる。

3. 負傷(被疵)の種類

史料Aには、宮崎城攻略において負傷(被疵)した家臣名とその負傷(被疵)の種類が記されている(表1参照)。その内訳と%を記すと、以下のようになる⁽¹⁷⁾。

鎧 疵…26人(56.5%)⁽¹⁸⁾

刀 疵 … 14人 (30.4%)

長刀疵 … 6人 (13.0%)

この負傷（被疵）の種類を見ると、攻城側の半分以上が鎧疵であるので、守城側の主力武器は鎧であったことがわかる。そのほか刀と長刀¹⁹⁾も守城側の武器として使用されたことがわかる。

上記の負傷（被疵）の種類において、攻城側に矢疵、鉄炮疵が皆無であることから、守城側は弓矢、鉄炮のような飛び道具を使用せず、鎧、刀、長刀を使用して戦ったことがわかる。

その理由としては、攻城戦であるため、攻城側がいきなり城に乗り込んで近接戦闘（白兵戦）を繰り広げたため、守城側は一定の射程距離を必要とする弓矢や鉄炮が使用できなかった（或いは、使用しなかった）ためと考えられる²⁰⁾。

上記の5軍編制（攻城側）の大將の負傷（被疵）を史料Aから見ると、以下のようになる（ただし、右松又左衛門の討死は史料Bによる）（表1参照）。

先 手 … 右松又左衛門（討死）

二の手 … 肥田木図書（鎧疵、長刀疵、刀疵）・長倉織部正（鎧疵）

三の手 … 矢野侃世（負傷〔被疵〕の記載なし）

四の手 … 長倉九郎右衛門（鎧疵）

五の手 … 落合浅之助（鎧疵、本丸一番乗り、鎧を合わす）

このように、先手の大將は討死し、矢野侃世を除くとそれ以外の大將は鎧疵を受けているので（肥田木図書は鎧疵のほかに長刀疵、刀疵を受けている）²¹⁾、大將自ら陣頭に立って戦ったことがわかる。落合浅之助は、本丸一番乗りをして敵（守城側）と鎧を合わせているので²²⁾、大將自ら先頭に立って本丸に真っ先に乗って戦ったことがわかる。こうした点は、当時の城攻めにおける戦闘形態を知るうえで参考になる。

4. 敵の重臣を討ち取ったことなどを特記

史料Aでは、宮崎城主をはじめとして敵の重臣²³⁾を討ち取った家臣については、そのことを特記している（表1参照）。具体的には以下ようになる。

榎藤平左衛門尉（宮崎城主）を討ち取る … 荒武猪右衛門尉

榎藤仲右衛門（榎藤平左衛門尉の嫡男）を討ち取る … 岩切四郎左衛門尉

榎藤八右衛門尉（榎藤平左衛門尉の次男）を討ち取る … 四本与左衛門尉

牧駒右衛門尉（榎藤平左衛門尉の甥）を討ち取る … 外山甚兵衛尉

万願寺（敵の重臣）を討ち取り、その鼻を討つ … 荷田脇清兵衛尉

慶長5年9月晦日(9月30日)～10月1日の伊東家軍勢による宮崎城攻略について(白峰)

飯田右衛門尉(敵の重臣)を討ち取る…横山善右衛門尉

湯地伝内(敵の重臣)を討ち取る…杉田助之丞

松葉六左衛門(敵の重臣カ)を討ち取る…篁尾山左衛門尉

また、史料Aでは、敵2人を討ち取った家臣についても、そのことを特記している(成合吉右衛門尉、荒武小八、谷口志摩助、谷口久右衛門尉)(表1参照)。

史料Bでは、敵の重臣と戦って討死した家臣などについては、そのことを特記している(表1参照)。具体的には以下ようになる。

大山刑部大輔(敵の重臣)と鑓を合わせて討ち取ったが、その鑓疵により討死…右松亦左衛門尉、

同三男・伴次

権藤仲右衛門(権藤平左衛門尉の嫡男)と渡り合い⁽²⁴⁾、討死…落合清右衛門尉、海老原次郎主従

稲津掃部助(稲津重政)の名代として一番に馳せ入り討死…富高次郎右衛門尉

以上のような特記事項については、戦功評価として高く評価されたことを意味しているのであろう。そのほか、史料A、史料Bには、家臣と共に戦った「小者」⁽²⁵⁾が討死した事例(成合吉右衛門尉の小者・新五郎が討死)、「三男」が共に討死した事例(上記の右松亦左衛門尉の三男・伴次が討死)、「主従」が共に討死した事例(上記の海老原次郎主従が討死)が記されている(表1参照)。

これらの事例からは、父子や主従で敵と戦ったことがわかり、当時の戦闘形態を知るうえで参考になる。

おわりに

上述したように、史料Aは宮崎城攻略に参戦して敵を討った者と被疵の者(伊東家家臣)のリストであり、史料Bは宮崎城攻略に参戦して戦死(討死)した者(伊東家家臣)のリストである。

こうした史料が残されている意味を考えると、一つの戦い(この場合は宮崎城攻略)に関して、勝者側の大名家(この場合は伊東家)において、家臣の戦功評価をするための客観的データが必要であり、それが史料として戦い直後に作成された、ということになる。

そして、何に基準をおいて戦功評価をしたのか、という点は、①宮崎城攻略に参戦して敵を討った伊東家の家臣名をリスト化する(史料A)、②宮崎城攻略に参戦して戦死(討死)した伊東家の家臣名をリスト化する(史料B)、③奮戦して負傷(被疵)した家臣はそのことを特記(被疵の種類も特記)する(史料A)、④本丸一番乗り、城の一番乗り、一番鑓をおこなった家臣はそのことを特記する(史料A)、⑤一番に馳せ入って討死した家臣はそのことを特記する(史料B)、⑥敵の城主(権藤平左衛門尉)や重臣などを討ち取った家臣はそのことを特記する(史料A)、⑦敵の重臣と戦って討死した家臣はそのことを特記する(史料B)、などから推測できる。

こうした戦功評価をした後に、該当の各家臣(討死した家臣については、その嫡子などの親族)に対して戦功

の証左として感状を出したものと考えられる。

攻城戦（宮崎城攻略）という意味では、史料Aには、複数の攻城ルートが明記されているので、その意義は大きいと言えよう。ただし、上述したように、宮崎城の登城口（宮崎城攻略では攻城ルートに該当する）の現地比定については、比定地の見解がわれている登城口があるので、今後は、登城口の現地比定の作業をより精査して宮崎城攻略の攻城ルートについて現地比定の確定をおこなっていく必要があるだろう。

[註]

- (1) 『清武町史』通史編上巻（清武町合併特例区編集・発行、2014年、204～214頁）。
- (2) 田代学「原典史料にみる宮崎城」（『宮崎県地方史研究紀要』第27輯、宮崎県立図書館編集・刊行、2001年）。
- (3) 『日向記』〈宮崎県史叢書〉（宮崎県、1999年、卜翁本、372頁）。
- (4) 前掲『清武町史』通史編上巻（208頁）。
- (5) 前掲『日向記』（373～383頁）。
- (6) 前掲『日向記』（383～385頁）。
- (7) 史料Aには「権藤平左衛門討捕」（下線引用者）などの表記があるが、「討捕」は「うちとらえる」ではなく「うちとる」と読むべきである。その根拠は『日本国語大辞典（第二版）』2巻（小学館、2001年、310頁）の「討取・撃取・打取（うちとる）」の項に、「表記」として「討捕」（『文明本節用集』、『易林本節用集』）と記載されていることによる。ちなみに、土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』（岩波書店、1980年、688頁）には「ウチトリ、ル、ツタ（討ち取り、る、つた）」の意味として「人を殺してその首を取る」としているため、当時、戦いにおける首取りが常態化していたことがわかる。
- (8) 「清武二十七人頭功録」（『清武町史』資料編1、通史編関係資料、清武町合併特例区編集・発行、2015年、121～124頁）という史料（表2）には、宮崎城攻略（前掲「清武二十七人頭功録」では「宮崎一戦」と表記）に参戦した伊東家の家臣名が記されていて、その中の鬼塚左衛門（史料Aでは「鬼塚左衛門尉」と表記）、岩切四郎左衛門（史料Aでは「岩切四郎左衛門尉」と表記）、牧藤左衛門（史料Aでは「牧藤左衛門尉」と表記）は史料Aに名前の記載があるが、次の伊東家の家臣については史料Aに名前の記載がないので、史料Aに名前の記載がなくても宮崎城攻略に参戦した伊東家の家臣がいたことがわかる。史料Aに名前の記載がないが、前掲「清武二十七人頭功録」において、宮崎城攻略に参戦した伊東家の家臣として名前の記載があるのは、真木藤左衛門（宮崎一戦の時、手柄を立てた）、石那田宗兵衛（宮崎一戦の時、敵一人を討ち取った）、大野伊賀（宮崎一戦の時、討死）、谷口仲右衛門（宮崎一戦の時、敵三人を討ち取った）である（表2参照）。なお、前掲『清武町史』資料編1、通史編関係資料（120頁）によれば、「清武二十七人頭功録」（宮崎県文献史料研究会蔵）の来歴について「五代飢肥藩主・伊東祐実の治世の始め、清武郷の下級藩士らが先祖の軍功を藩に申し出た時の覚書である。おそらく飢肥藩清武役所によって寛文三年（一六六三）十一月五日に認められたものと思われる。裏表紙に、旧記の収集に熱心だった松井五郎兵衛の署名が書かれていることから、安永七年（一七七八）八月十三日に松井によって写されたものと思

慶長5年9月晦日(9月30日)~10月1日の伊東家軍勢による宮崎城攻略について(白峰) われる。その後、同題功録の伝来経緯は不詳ながら、昭和十三年六月発行の『古典蒐報第三号』(神戸市の藤本書屋発行)に掲載されていて、伊東家あるいは平部嶺南が収集した史料の一点だったと思われる。」としている。

- (9) 前掲『清武町史』通史編上巻(208頁)。ただし、この伊東家の陣立ての史料的典拠については記載されていない。
- (10) 「同年(引用者注:慶長5年)九月二十九日の夜、清武城主稲津掃部助が大將となり大兵を率いて宮崎城を襲った」(石川恒太郎「宮崎城」、『日本城郭大系』16巻、新人物往来社、1980年、214頁)とする見解があるが、この編制によれば、稲津重政は後詰として清武城に在留しているので、宮崎城攻めには加わっていないことになる。その証左として、後述のように、宮崎城攻めにおいて、富高次郎右衛門尉は、稲津重政の名代として一番に馳せ入り討死している。
- (11) 『宮崎城跡』〈宮崎市文化財調査報告書第132集〉(宮崎市教育委員会、2020年、8、42、43頁)。
- (12) 新名一仁『現代語訳 上井覚兼日記2』(ヒムカ出版、2021年、231頁)。
- (13) 新名一仁『『上井覚兼日記』にみる南九州の城郭—その利用実態と攻城戦—』(『第34回全国城郭研究者セミナー シンポジウム「幕末の城」』レジュメ集、第34回全国城郭研究者セミナー実行委員会、中世城郭研究会、2017年、22頁)。
- (14) 前掲・新名一仁『『上井覚兼日記』にみる南九州の城郭—その利用実態と攻城戦—』では、前掲『日本城郭大系』の宮崎城縄張図における野首口を和田口に比定し、前掲『日本城郭大系』の宮崎城縄張図における船ヶ崎口を野首口に比定している、という違いがある。
- (15) 前掲『宮崎城跡』(47頁)では「満願寺(万願寺)口」について「最もメインとして利用されている山麓の満願寺跡付近を起点として曲輪Ⅰ(主郭)・Ⅲ(野首城)間の堀切に東から入る道」としている。
- (16) 前掲・新名一仁『『上井覚兼日記』にみる南九州の城郭—その利用実態と攻城戦—』では、「目曳口(目引口)」について「曲輪ⅠとⅢの間の鞍部から西側(字目引)にのびる登城路」としている。
- (17) 1人で複数の種類の負傷(被疵)をした事例もある。
- (18) 小数点第二位を四捨五入した。以下、同じ。
- (19) 「薙刀は、徒歩兵あるいは僧兵の武器として主に用いられ、中世を通して「長刀」と表記される」(樋口隆晴・渡辺信吾『図解武器と甲冑』、株式会社ワン・パブリッシング、2020年、24頁)。
- (20) 城攻めではなく、野戦であれば、弓矢や鉄炮は使用されたはずである。
- (21) 矢野侃世だけは被疵の記載はないが、これは万願寺口、目引口というメインルートではなく野頸口から攻め込んだことと関係するのかもしれない。
- (22) 史料Aには、落合浅之助以外に、成合吉右衛門尉は城の一番乗り、河添源右衛門尉は本丸一番乗り、上村奎左衛門尉は一番鐘の記載がある(表1参照)。史料Bには、富高次郎右衛門尉は稲津重政(掃部助)の名代として一番に馳せ入り討死、の記載がある(表1参照)。この事例は、上述のように稲津重政は後詰として清武城に在留していて、宮崎城攻略に参戦できなかったため、その名代として一番に宮崎城に馳せ入って討死した、ということであろう。

- (23) 守城側の重臣の具体的名前は、前掲『日向記』(372～373頁)に記されている。
- (24) 前掲『邦訳日葡辞書』(681頁)には「ワタリアイ、ヤウ、ヤウタ(渡り合ひ、ふ、うた)」の意味として「敵に会って互いに斬りつけ合うことに言うのが本来の正しい言い方である」としている。
- (25) 「小者(こもの)」とは「武家奉公人の一つ。(中略)一般には中世・近世に武家に仕え、平時には雑役に従事し、戦時には主人の馬前にあつて勤仕したものをいった。」(『国史大辞典』6巻、吉川弘文館、1985年、36頁、執筆は北原章男氏)。

【付記】

本稿は、第38回全国城郭研究者セミナー「文献史料からみた攻城戦の実態」(期日:2022年8月20日〔土〕～28日〔日〕、主催:第38回全国城郭研究者セミナー実行委員会・中世城郭研究会)のレジュメ集(紙上報告)における拙稿「慶長5年9月晦日(9月30日)～10月1日の伊東家軍勢による宮崎城攻略について」に加筆したものである。

表1

伊東家軍勢による宮崎城攻めの際に敵を討った者と被疵の者のリスト

(『日向記』〈宮崎県史叢書〉、373～383頁)

同城(宮崎城)乗の時、敵を討つ、ならびに、疵を蒙る人数(※本稿における史料Aに該当する)

鑓疵 <small>やりきず</small> 、長刀疵、刀疵	万願寺口より詰め登る	肥田木図書助
鑓疵	舟ヶ城より攻め上る	長倉織部佐
鑓疵 本丸一番乗り、鑓を合わす	目引口より攻め上る	落合浅之助
鑓疵	同所(目引口)より	長倉九郎右衛門尉
鑓疵二ヶ所	万願寺口より	長沼加兵衛尉
鑓疵	同所(万願寺口)より	落合平左衛門尉
鑓疵	目引口より	稲津九郎兵衛尉
長刀疵	万願寺口より	時任伴右衛門尉
	同所(万願寺口)より	堤五左衛門尉
	同所(万願寺口)より	黒木惣右衛門尉
	同所(万願寺口)より	壱岐与右衛門尉
	同所(万願寺口)より	松葉又兵衛尉
	柏和田口より	長沼孫左衛門尉
	野頸口より	矢野侃世
鑓疵		稲用孫兵衛尉
		佐土原瀬兵衛尉
		荒武勘左衛門尉
		右松市左衛門尉
		平部長右衛門尉
	目引口より	川崎七右衛門尉
	同所(目引口)より	荒武五郎右衛門尉
		田中四郎左衛門尉
		甲斐玄番 <small>(ママ)</small> (蕃カ)允
	舟ヶ城より	東伝助
鑓疵		落合五郎兵衛尉
図師伊与(「を討捕」脱カ)、 城の一番乗り、鑓疵、敵二人 を討、小者新五郎が討死す		成合吉右衛門尉

		海老原助之丞
鎧疵、刀疵		岩切角左衛門尉
榑藤平左衛門尉を討捕		荒武猪右衛門尉
鎧疵、長刀疵	榑藤仲右衛門を討捕	岩切四郎左衛門尉
		堀次郎兵衛尉
		落合市兵衛尉
鎧疵、長刀疵		肥田木又右衛門尉
疵四ヶ所、鎧疵、長刀疵		赤目作左衛門尉
鎧疵		清作内
		久米田右衛門佐
鎧疵	牧駒右衛門尉を討捕	外山甚兵衛尉
万願寺を討捕、また舅を討		荷田脇清兵衛尉
鎧疵、本丸一番乗り		河添源右衛門尉
鎧疵	飯田右衛門尉を討捕	横山善右衛門尉
鎧疵、刀疵四ヶ所		外山三郎左衛門尉
		佐伯内藏丞
鎧疵		荒武弥兵衛尉
		後藤主計助
鎧疵		谷口次郎左衛門尉
		長沼市右衛門尉
刀疵		長嶺弥右衛門尉
		安藤新左衛門尉
		長野甚兵衛尉
		長友次郎左衛門尉
刀疵		久米田七右衛門尉
刀疵		長友吉兵衛尉
鎧疵		稲持宗右衛門尉
		猪股又左衛門尉
榑藤八右衛門尉を討捕		四本与左衛門尉
		壱岐越中守

慶長5年9月晦日(9月30日)～10月1日の伊東家軍勢による宮崎城攻略について(白峰)

		後藤十郎右衛門尉
		壱岐孫左衛門尉
		平部伴左衛門尉
刀疵		加藤七左衛門尉
		下村助左衛門尉
		宮田五郎右衛門尉
二人を討捕		荒武小八
		田爪又左衛門尉
		和田千太夫
		和田正右衛門尉
		弓削九郎左衛門尉
		長友右衛門兵衛尉
刀疵		大野弥右衛門尉
刀疵		松田平兵衛尉
刀疵		松田平六兵衛尉
		岩切右馬助
二人を討捕		谷口志摩助
		長友次右衛門尉
		伊左尾市左衛門尉
		弓削次郎右衛門尉
		河添相兵衛尉
鎧疵		宮浦又右衛門尉
		落合舎人允
		弓削久左衛門尉
		阿万五郎兵衛尉
刀疵		懸川孫右衛門尉
		平原角右衛門尉
		井上吉右衛門尉
		都々川千右衛門尉
刀疵		吉田孫右衛門尉

		児嶋七左衛門尉
		日高内蔵助
		児嶋次左衛門尉
		年見十右衛門尉
		斉藤兵部丞
		奈須八郎兵衛尉
		鬼塚左左衛門尉
		岩切伴右衛門尉
		阿万左右衛門尉
		阿万十郎左衛門尉
		村角藤右衛門尉
長刀疵		弓削四郎右衛門尉
鍵疵		黒木玄番 <small>(ツツ)</small> (蕃カ) 允
		川崎有右衛門尉
		田辺隼人助
		落合市助
一番鍵		上村左左衛門尉
		矢留新左衛門尉
		広瀬余三
		切通伴右衛門尉
		日高藤兵衛尉
		日高藤右衛門尉
		蓑毛相右衛門尉
刀疵		懸川久蔵
		安井相右衛門尉
		郡司仲右衛門尉
		永田久内
		落合弥六
		弓削右之助
湯地伝内を討		杉田助之丞

		比江嶋次兵衛尉
		黒木善兵衛尉
		政所隠岐助
		井上五郎右衛門尉
鎧疵		爰野相兵衛尉
		小田千右衛門尉
		藤田筑右衛門尉
		海老原紀伊介
		和田兵左衛門尉
		串間久助
		野上喜左衛門尉
		落合四郎左衛門尉
		橋口角右衛門尉
		石那田市右衛門尉
鎧疵		赤目右兵衛尉
刀疵		佐藤新五郎
松葉六左衛門を討捕		篋尾山左衛門尉
二人討捕		谷口久右衛門尉
		日高久右衛門尉
		吉野仲兵衛尉
		井久保主殿助
		谷口監物
		奥野千右衛門尉
		真方孫助
		落合甚右衛門尉
		崎田助左衛門尉
		平井八郎左衛門尉
		牧藤左衛門尉
本来、宮崎衆(を)一番に案内せし者也		和田重右衛門尉

右の人数口々方々より攻登り合戦、分捕高名す、此外にも手柄の者数々也

同時、討死 (の) 人数 (※本稿における史料Bに該当する)

大山刑部大輔と鎌を合せ、討ち取る。その鎌疵 (を) 負い死す。	右松亦左衛門尉 同三男伴次	
榎藤仲右衛門尉に (とカ) 渡り合い、討死	落合清右衛門尉	
同上	海老原次郎助主従	
掃部助 (=稲津掃部助) (の) 名代として一番に馳せ入り討死	富高次郎右衛門尉	
	吉田平内	白井長兵衛尉
	矢野金右衛門尉	荒武小兵衛尉
	横山源兵衛尉	俣江作之丞
	小田原左近	小山田真源斎
	松葉六左衛門尉	長友助作
	川越彦作	長嶺八右衛門尉
	川越彦十郎	湯前彦六左衛門尉
	金丸彦作	黒木助十郎
	岩切右衛門尉	青木次郎四郎
	公文織部助	奥野小助
	黒木藤七兵衛尉	内田新助
	川越小次郎	横山太兵衛尉
	円目次郎四郎	根井伴助
	青野弥右衛門尉	鈴木太郎次郎
	年見勝吉	坂下久太
	鈴木彦作	日野雅楽助
	篠原岩助	安井新十郎
	伊比井二右衛門尉	日高次郎助
	津曲源四郎	借屋原小兵衛尉

右の者共、名誉の討死を仕也、此外雑兵数々也、田野衆 (の) 長倉五郎右衛門尉・海老原越中介・楠原彦左衛門尉等、九月晦日の夜よりの野・倉永に人数を伏せ置く、同十月朔日の朝、穆佐の軍兵と暫し取合い (注1)、放火して直に細江に番をなしけり、宮崎城主榎藤父子三人の頸、即ち一学坊と云し山伏を使者にて、檢使同船にて (黒田) 如水翁の陣所、筑後国の内、水田と云所迄為持遣しければ、如水翁早速の功を感じ玉ひて、留主居中へ賜し状に云 (後略)

※表1において、史料中のカタカナ表記は、ひらがな表記、或いは、漢字表記に改めた。また、送りがなを適宜補足した。

(注1) 土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』(岩波書店、1980年、664頁)によれば「トリアイ、ワウ、ワウタ(取り合ひ、ふ、うた)」は「互いに戦う、あるいは、喧嘩する」という意味である。この場合は、「互いに戦う」という意味である。

表 2

「清武二十七人顕功録」

『清武町史』資料編 1, 121～124 頁)

寛文三年癸卯霜月五日、清武住人先祖申立覚書

身分	現在の清武住人	功績があった先祖	功績の理由	御褒美
柳馬場知行取	日高善兵衛	親	嶋原にて城攻めの時、鉄炮をよく打つ。	鳥目を下された。
同所浮世人(注1)	真木十左衛門	親・藤左衛門	宮崎一戦の時、手柄をたてた。(注2)	玄龍様(三代臥肥藩主・伊東祐久)の代に聞こし召されたので、無役之屋鋪を藤左衛門一世に下し置かれた。
同所知行取	日高角左衛門	祖父・諸井孫四郎、 同孫次郎	伊東祐国の御共をして法音寺同所にて討死。 (注3)	その後、諸井駿河が清武表にて足軽大将を命じられた。
黒坂知行取	岩切理左衛門	祖父・右馬之助	宮崎一乱の時、佐土原追籠(の時)に敵一人を討ち取った。(注4)	玄龍様の御代に隠居屋敷を下し置かれた。
同所知行取	谷口六右衛門	右同断(注5)		
同所知行取	岩切彦右衛門	右同断(注6)		
同所同	米良仁右衛門	祖父・筑後	真崎にて討死御奉公。(注7)(注8)	親・六右衛門方へ知行三十石と徒士座段(役カ)を命じられ、御奉公した。
同所同	野崎六之丞	(本人)	嶋原にて城攻めの時、鉄炮をよく打つ。	鳥目を下された。
今江屋敷取	後藤嶋之助	祖父・嶋之丞	庄内(の乱)において伊集院忠真が籠城した時、手柄をたてた。	玄龍様の代に聞こし召されたので、無役屋鋪一ヶ所を嶋之丞一代に命じられた。

同所知行取	由地鉄右衛門	親・傳右衛門	江戸の辻番に行った時、南部山城殿衆が人を切って逃げたのを、真田伊豆殿の門前にて河野茂兵衛同前にとらえて渡した。	鳥目亮メヌを命じられた。
志わす崎浮世人	鬼塚三左衛門	祖父・左左衛門	宮崎一戦の時、手柄をたてた。	玄龍様の御代に聞こし召されたので、左左衛門一代に屋鋪一(ヶ)所、無役を命じられた。
黒坂知行取	岩切由右衛門	祖父・四郎左衛門	宮崎一戦の時、権藤忠右衛門を討ち取った。 (注9)	四郎左衛門へ知行五石と無役を命じられた。その後、御家中惣算により変った時に召し上げられた。
同所浮世人	岩切半左衛門	右同断(注10)		
同所知行取	岩切四郎左衛門	右同断(注11)		
田野知行取	石那田宇右衛門	祖父・宗兵衛	宮崎一戦の時、敵一人を討ち取った。	
田野社人(注12)	大野加兵衛	祖父・伊賀	宮崎一戦の時、討死。	
中野知行取	牧駒左衛門	親・藤左衛門	宮崎一戦の時、手柄を立てた。	玄龍様の御代に聞こし召されたので、藤左衛門一世に無役屋鋪を下された。
同所知行取	谷口半左衛門	祖父・仲右衛門	宮崎一戦の時、敵三人を討ち取った。	無役の知行七石を命じられた。その後、御仕置が変った時、惣算により役目知行に命じられた。この手柄を立てた時、球友(長倉織部)からも褒美として鎧甲を下され、今に所持している。
中野知行取	長友三右衛門	右同断(注13)		
同所知行取	谷口仲口口口	右同断(注14)		
同所知行取	杉田源兵衛	祖父・源兵衛	高麗陣・大津城攻め(の時)やなせ口方にて、手柄を立て、鏝疵・鉄砲疵を数ヶ所負った。	玄龍様の御代に聞こし召され、上代一代に無役の屋鋪を命じられた。

同所同	横山又右衛門	祖父・仁兵衛	宮崎一乱の時、佐野・田野伏の敵一人を討ち取った。	
同所同	安藤諸左衛門	祖父・宮内左衛門	宮崎一乱の時、討死。	
同所同	小田原次兵衛	祖父・惣右衛門	宮崎一乱の時、佐土原追籠（の時）に敵二人を討ち取った。	
同所同	小田原半左衛門	祖父・惣右衛門 親・惣右衛門	宮崎一乱の時、佐土原追込（の時）に敵二人を討ち取った。 （佐土原追込の時に敵）一人を討ち取った。	
同所同	小田原宇右衛門	曾祖父・宇右衛門 祖父・藤左衛門	□城の御陣にて薩州勢にかけ合い、討死御奉公。（注15）（注16） 宮崎一戦（一乱カ）の時、佐土原追込の時、小田八幡大宮司大坊という人を討ち取った。	
中野知行取	長友源右衛門	祖父・大乗坊	高橋元種領内の引綱という在所にいた時、宮崎一乱以前、稲津重政より召し出され、間もなく宮崎城を攻めるので、（伊東家の）軍勢を案内するように命じられた。御奉公しようとして帰った。この首尾にて（宮崎）城攻めの際は、御家（伊東家）の軍勢を城中へ繰り入れ、火をかけたので落城した。その後、（伊東家の）御領内で堪忍していたが、大乗坊の弟の彦六左衛門に召し返すようにと高橋元種よりことわりがあったので召し返された。この城攻めの際の裏切りをした罪により大乗坊と彦六左衛門は死罪を命じられた。	玄龍縁の御代に聞こし召され、親の弥右衛門に土器座段（役カ）の免除を命じられた。

- (注1)「浮世人(うきよにん)」とは「日向国(宮崎県)で在郷武士(農兵)を称した語」(『日本国語大辞典(第二版)』2巻、小学館、2001年、154頁)という意味である。
- (注2)「宮崎一戦」とは宮崎城攻略を指すと考えられる。
- (注3)伊東祐国は、飢肥城外の戦いで文明17年(1485)に戦死した。
- (注4)「宮崎一乱」とは宮崎城攻略後の他方面での戦いを指すと考えられる。
- (注5)祖父は同様に右馬之助であり、功績理由も同様、という意味と思われる。
- (注6)祖父は同様に右馬之助であり、功績理由も同様、という意味と思われる。
- (注7)「真崎」とは「真幸^{マコキ}(現宮崎県えびの市)を指すと考えられる。ただし、具体的にどのような戦いであったのかは不明である。
- (注8)「討死御奉公」という表記は、家臣の「討死」が主君への「御奉公」になる、という意味と考えられ、その意味で注目される表記である。
- (注9)権藤忠右衛門は、宮崎城主・権藤平左衛門(種盛)の嫡男である。
- (注10)祖父は同様に四郎左衛門であり、功績理由も同様、という意味と思われる。
- (注11)祖父は同様に四郎左衛門であり、功績理由も同様、という意味と思われる。
- (注12)「社人(しゃじん)」とは「村里の人。村人。里人。」(『日本国語大辞典(第二版)』6巻、小学館、2001年、1129頁)という意味である。
- (注13)祖父は同様に仲右衛門であり、功績理由も同様、という意味と思われる。
- (注14)祖父は同様に仲右衛門であり、功績理由も同様、という意味と思われる。
- (注15)「口城の御陣」とは、木崎原合戦(元龜3年[1572])のことであろうか。
- (注16)「かけ合い」の意味については、土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』(岩波書店、1980年、93頁)に、「カケアイ(駆け合ひ)」の意味として「騎馬の軍勢どうしの遭遇戦」、「カケアイ、ワウ、ワウタ(駆け合ひ、ふ、うた)」の意味として「騎馬の人々が遭遇し戦う」と記されている。

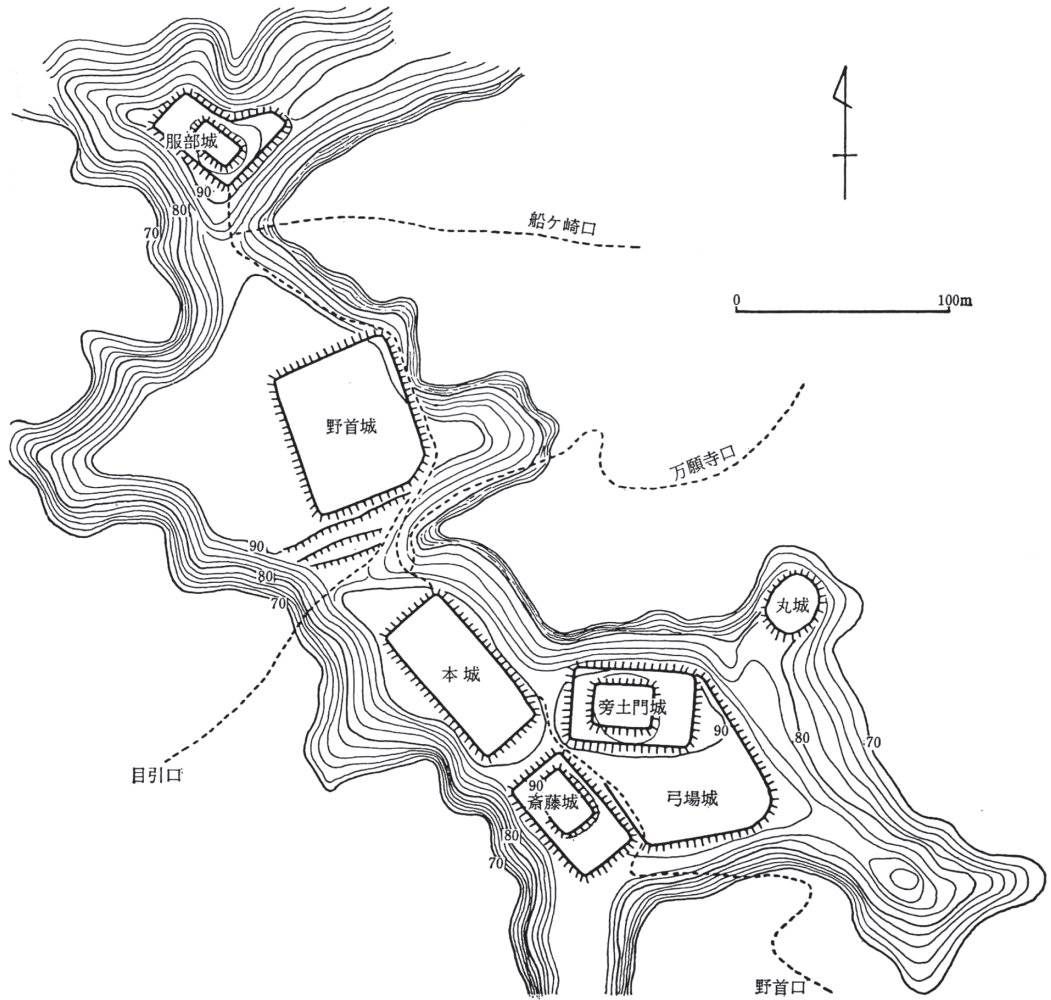


図1 石川恒太郎氏作成の宮崎城跡縄張図
※「宮崎城」(『日本城郭大系』16巻、新人物往来社、1980年)より転載

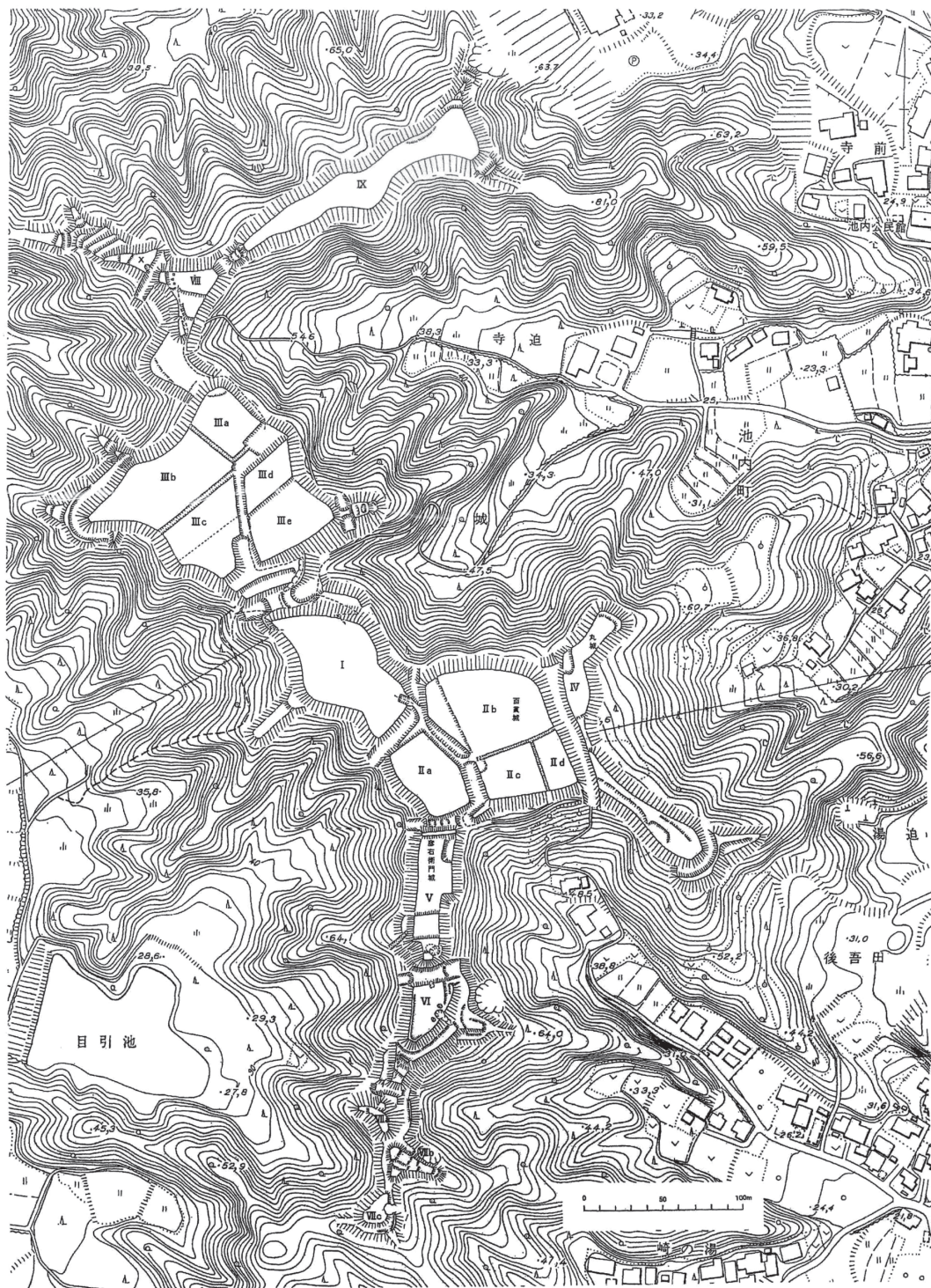


図2 千田嘉博氏作成の宮崎城跡縄張図

※「宮崎城の構成」(『宮崎城跡測量調査報告書』、宮崎市教育委員会、2009年)より転載

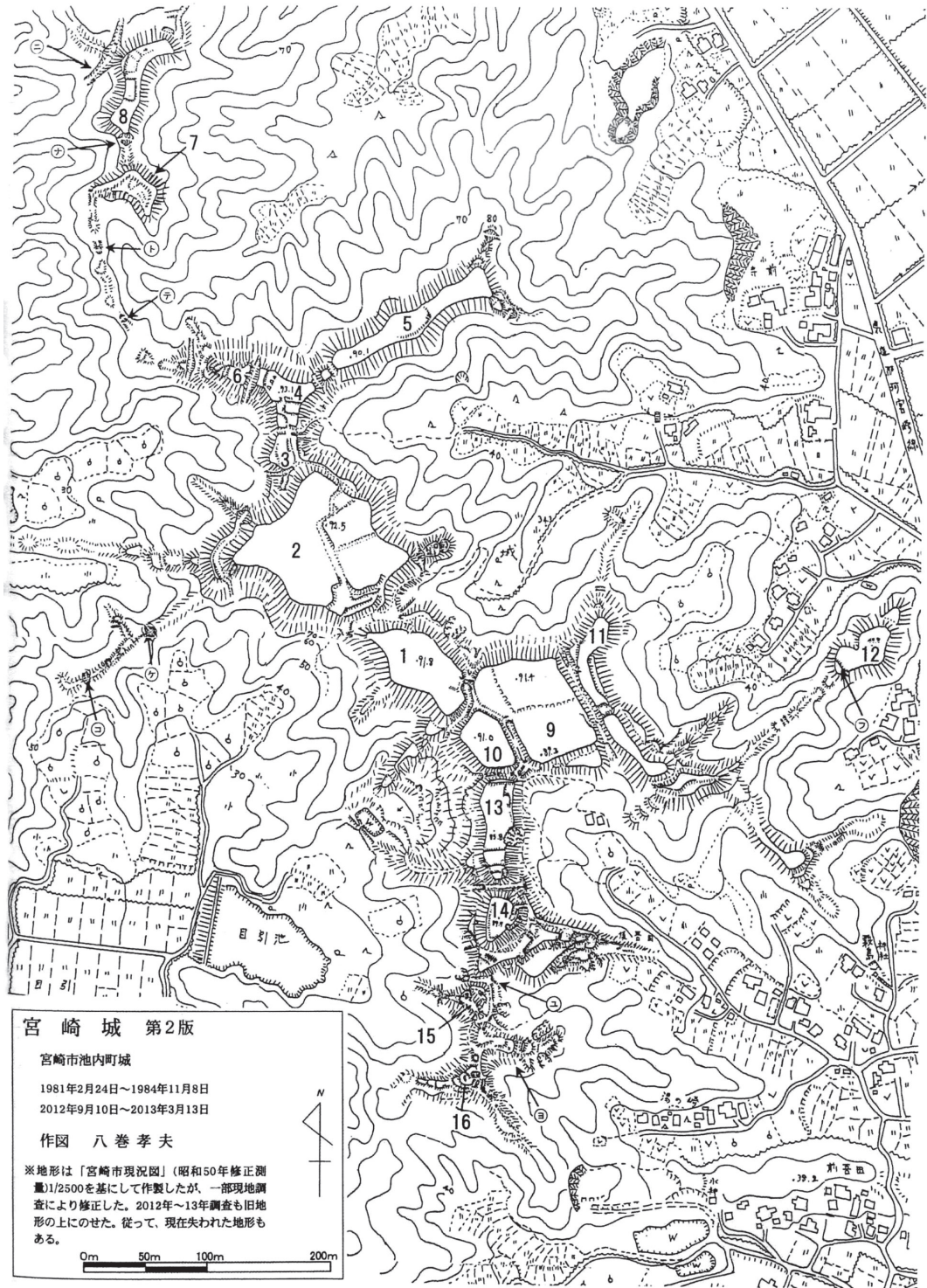


図3 八巻孝夫氏作成の宮崎城跡縄張図(第2版)

※「日向国・宮崎城の基礎研究」(『中世城郭研究』27号、中世城郭研究会、2013年)より転載

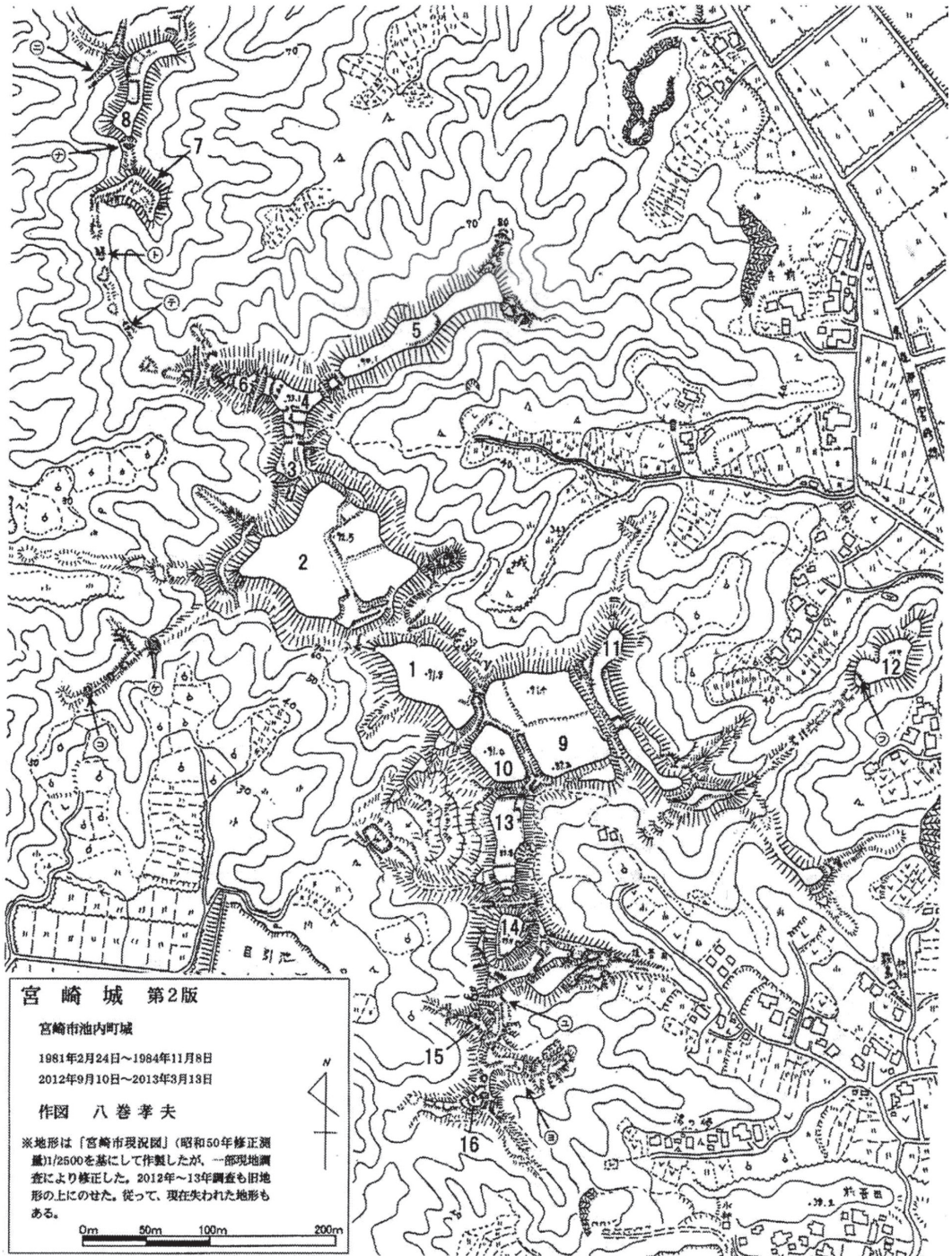


図4 八巻孝夫氏作成の宮崎城跡縄張図(2013年)

※曲輪の番号は、八巻孝夫氏が付したものである。その一部には『日向地誌』などに記された伝承名が残っている。八巻孝夫「日向国・宮崎城の基礎研究」(『中世城郭研究』27号、2013年)にもとづき、分かる範囲で通称名・伝承名を載せる。

1:本丸、本城 2:野首城 4:服部城 5:射場城 9、10:百貫城、百貫ショウジ、南城
 11:猿渡、馬乗馬場 13:彦右衛門丸、彦エ門城 14:マル城、丸城

※新名一仁『現代語訳 上井覚兼日記2』(ヒムカ出版、2021年)より転載